



大原美術館



倉敷考古館

教室を飛び出し、 展示室へ——学校まるごと美術館

観光地に位置する大原美術館には、毎年、遠足や校外学習、修学旅行などで多くの学校団体が来館しています。また、当館は就学前の5歳児を対象とした鑑賞体験の受け入れも行っており、子どもたちが成長段階に応じて美術に親しむ機会を大切にしています。

今回ご紹介する「学校まるごと美術館」は、こうした取り組みの中でも、地域の学校と美術館が協働して実施する特色ある事業です。「学校まるごと美術館」は、大原美術館近隣の倉敷東小学校、倉敷西小学校の全校児童が、休館日に美術館を訪れ、展示室を舞台に授業を行う取り組みです。1年生から6年生までの児童が時間差で来館し、発達段階に応じた内容で活動しており、美術館全体が1日限りの学びの場となります。

この取り組みの大きな特徴の一つは、授業を美術館スタッフが一方的に提供するのではなく、学校の先生が主体となって授業を考え、進行している点です。



「美術館で授業」と聞くと、図画工作の活動を想像されるかもしれませんが、実際には国語や社会、生活科など、教科を横断した学びが展開されています。美術館スタッフは、展示室の環境や作品の特性を踏まえながら、先生方の授業づくりを支えています。

例年6年生は、こうした活動の集大成として「模写」に取り組んでいます。「模写」といっても、単に自分の好きな作品を

描くものではありません。例えば「相手意識を育む」という目的を設定し、「誰かに贈りたい作品」というテーマのもとで作品を選び、丁寧に見つめながら模写を行います。展示室で真剣に作品と向き合い、贈る相手のことを思い浮かべながら筆を進める子どもたちの姿からは、6年間にわたり美術館に親しんできた経験の積み重ねが感じられます。

展示室を巡る中で、子どもたちからは「作品の場所が変わっている」「この絵、はじめて見る!」といった声があちこちから聞こえてきます。毎年美術館を訪れている子どもたちだからこそ生まれる、作品との再会や新たな発見の瞬間です。美術館が「特別な場所」であると同時に、「日常の学びにつながる場」として子どもたちの記憶に積み重なっていくこと——それが「学校まるごと美術館」の大きな魅力です。

（研究部
研究員・エデュケーター

寺元 静香 記

